

第三講 表象化される記憶と文化史・歴史

レポート講評

記憶の教訓化

一番多い答えだった。しかし教訓はいかに平和が貴重かだけではなく、如何に次の戦争をうまく戦うのかという教訓もあることを忘れてはならないだろう。戦史研究というのがそのジャンルに属する。しかもその歴史は古代ギリシアにまで遡り、長い歴史を誇っている。

失敗と成功、そのどちらが教訓として有効なのか？

自己存在の記憶化

忘却への恐れ・・・碑文や文書を破壊しようとするものへの呪い（古代シュメールやギリシアなど）

記憶の自己顕示

政治的・社会的な意味を重視

自らを正当化

レポートの問題点

記憶の社会化・政治化・イデオロギー化への言及がなかった。記憶を共有するということがその社会の成員であるということの証となる。その為に学校における歴史の授業がある。進級のため、卒業のため、入学のために公式化された過去を記憶しておくことが求められていないだろうか？何のために記念碑があり、祇園祭のように祭典化されるのか？また公式化された記憶とは同時に権威づけられた記憶であり、ステレオタイプ化された記憶でもある。

記憶の場としてのモニュメント（記念碑）

円山公園の「新聞少年の像」・「ラジオ塔」・「坂本竜馬と中岡慎太郎像」

金沢城公園の巨大な「ヤマトタケルの像」・・・西南戦争

の戦没者を祀る。明治 13 (1880) 年建立。

花の御所を示す石碑 (今出川室町北東角) : 従是東北 足利
將軍室町第址

モニュメント

表象化する記憶

昭和という時代を象徴 : 経済恐慌・戦時体制・戦後復興と
民主化・所得倍増・三種の神器 (テレビ・電気洗濯機・電
気冷蔵庫)

貧困と苦学・立身出世・近代化・国民動員・革新性への願
望

記憶の統合機能=共同体への帰属意識の形成

共有される記憶は同じ価値観を共有する集団を形成し、
人々を統合する (ファンクラブ・野球場・同窓会など)
民族という集団に共有される「集合的記憶」

P・ノラ (1931 年～)

ピエール・ノラ編 (谷川稔監訳) 『記憶の場』 (岩波書
店 : 2002-03 年)

移民の流入によるフランス人の文化的アイデンティ
ティ喪失の危機

フランス国民の「集合的記憶」

ウェルキングトリクス・フリジア帽など

多民族・多文化社会 (移民社会) への批判

グローバル化への批判

記憶による他者の創出

共有化されない記憶の存在

植民地の記憶と宗主国の記憶の位相差

同一空間に生じる異次元世界の共存

記憶と記憶の相克

記憶の背景に横たわる歴史・社会・文化の相違

記憶の統合・異質性の承認

会津の幕末戊辰戦争の記憶

明治政府の「正統史観」との相克

アテナイ帝国の記憶

トゥキュディデスとイソクラテス

記憶と文化史（歴史）の関係

国民的アイデンティティへの統合を目指す

ブルカ禁止

単なる記録・記憶は文化史（歴史）になるのか？

・Historizein(探求する)→History（歴史）

何故、ペルシア戦争が起きたのか。

直接的にはイオニアの反乱にアテナイとエレクトリアが援軍を派遣したこと。

原因を探求。「何故」という好奇心。

ソフォクレスの『オイディプス王』と共通

イオニア哲学の産物（神話を批判）

記憶における自己正当化

不都合な記憶の忘却・修正

都合の良い記憶の創作・反復・拡散

自我の防衛本能

心的ストレスの回避

文化史（歴史）における価値中立性の原則

権威・権力からの距離

記憶と文化史（歴史）の相克

記憶の反歴史主義